研究開発の成果は必ずしも具体的な事業化にはつながらない。しかしながら研究開発者としてこのギャップを埋めるために有効な方法は考えられる。以下の2つの取り組みが有効であると考える。

まず1つ目が研究開発のテーマ、出発点を慎重に検討することである。たとえ世界初であり優れた成果が出ていたとしても社会で活用できる場面が限られていれば、事業にすることは困難である。仮に事業となったとしても限られた場面では十分な収益とならず持続的なサービスの提供は難しいだろう。事業化を見据えた研究開発であれば、事業化にあたって何を求められているのか、活用できる範囲はどのくらい広いのかをあらかじめ検討をつけておくと死の谷を乗り越えやすくなるだろう。例えば論文から固有表現抽出をする研究では優れた精度で抽出ができたとしても研究者の役には立つがそれ以上の範囲での活用は難しい。

　2つ目が研究開発を環境に合わせて柔軟に進めることである。社会の環境は常に変わりゆくものであるのに対し、研究開発は時間のかかるものであるため、慎重に決定したテーマであっても成果が出るまでに社会のニーズとマッチしなくなることは十分にありうることである。ゆえに研究開発は視野を広く保ち進めなければならない。例えば企画経営者と定期的に交流し、方針をすり合わせておくこと、社会に活用のために必要な利用環境や場面があることを調査・確認する必要がある。

　研究開発の成果の事業化は、資金調達など研究開発者では解決できない問題もあるが、研究開発者の以上のような取り組みがギャップを埋めるために有効であると考える。